次の文章を読み、問1〜3に答えよ。

74歳女性。主訴は、下腹部の違和感、下痢、嘔吐である。

現病歴：　うつ病の治療目的に精神科病棟に入院中であった。前日の夕方から下腹部の違和感が出現し、その後、下痢と嘔吐も出現した。嘔吐後に苦痛は緩和するものの、すぐに増悪した。その後も下痢と嘔吐を繰り返したため、当科を受診した。

既往歴：　54歳時に乳癌で左乳房全摘術、73歳時に子宮体癌で子宮全摘術、両側付属器、大網切除後で、いずれも現在まで再発所見なし。

20代頃よりうつ傾向を指摘されていたが、診断時期などは詳細不明。

現症：意識は清明。身長159.8cm、体重44.4kg、体温37.2℃、脈拍91/min、血圧139/97mmHg。

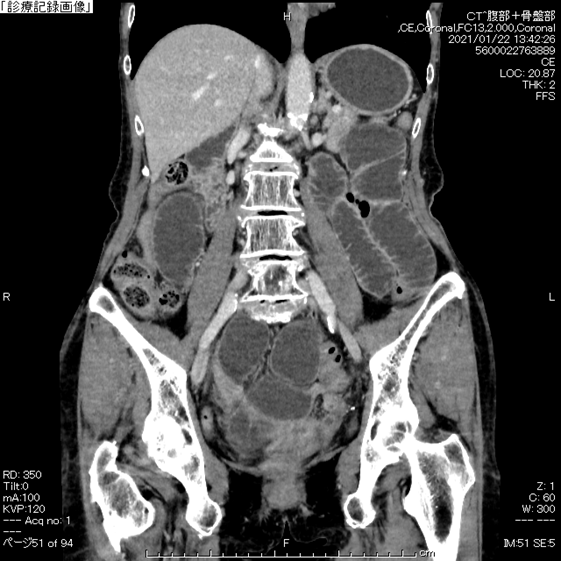
腹部は平坦・軟。圧痛および反跳痛なし。下腿に浮腫を認めない。

検査所見：血液所見：赤血球437万/uL、Hb 14.0g/dL、Ht 41.3％、白血球12140/uL、血小板41.3万/uL

生化学所見：総蛋白8.0g/dL、アルブミン4.2g/dL、AST 37単位、ALT 25単位、LD 235単位、ALP 109単位、γ−GTP 31単位、コリンエステラーゼ249mg/dL、アミラーゼ103mg/dL、尿素窒素31mg/dL、クレアチニン1.04mg/dL、総ビリルビン0.8mg/dL、Na 139mEq/L、K 3.6mEq/L、Cl 97mEq/L

免疫血清学検査：CRP 0.31mg/dL

画像を以下に示す。



問1　この患者の症状の原因として正しいものはどれか。

1. 偽膜性腸炎
2. 子宮体癌の小腸転移
3. 虫垂炎
4. 癒着性イレウス
5. 感染性腸炎

問2　この病態にみられる可能性のある症候はどれか。2つ選べ。

1. 筋性防御
2. 金属音聴取
3. 排ガス停止
4. Blumberg徴候
5. 血便

問3　対応として適切なものはどれか。3つ選べ。

1. イレウス管の挿入
2. 輸液
3. 緊急開腹手術
4. 血液透析
5. 絶食

答え：

問1　　ｄ

問2　　ｂ，ｃ

問3　　a，b，e

次の文章を読み、問1〜3に答えよ。

26歳女性。Crohn病の治療目的に当科を紹介受診した。

現病歴：　15歳時に慢性の下痢があり、Crohn病の診断を受けた。その後、生物学的製剤や免疫調節薬などで治療を受けており、寛解と再燃を繰り返している状態であった。5か月前から毎食後に腹痛があり、当科を紹介受診した。現在、1日に2〜3行の下痢を認めている。

既往歴：　26歳時に右鼠径ヘルニアで手術

現症：　意識は清明。身長153.3cm、体重46.7kg、体温37.0℃、脈拍72/min、血圧113/66mmHg。

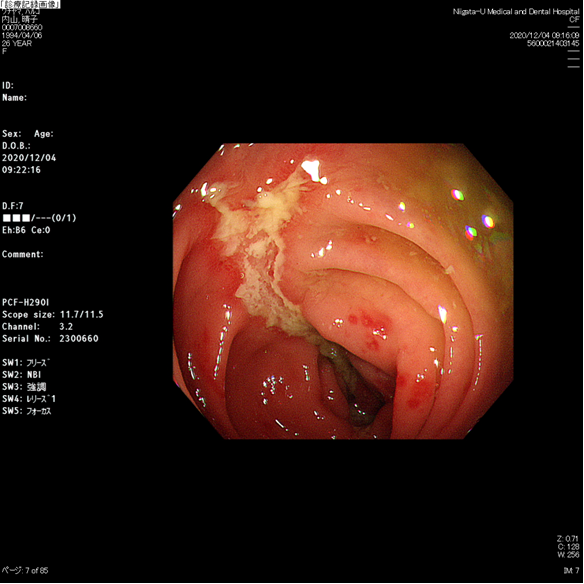
腹部は平坦・軟。下腹部正中に圧痛を認める。下腿に浮腫を認めない。

検査所見：血液所見：　赤血球 454万/uL、Hb 13.4g/dL、Ht 41.7％、白血球9760/uL、血小板29.4万/uL

生化学所見：　総蛋白7.1g/dL、アルブミン4.0g/dL、AST 16単位、ALT 14単位、LD 134単位、ALP 65単位、γ−GTP 42単位、尿素窒素6mg/dL、クレアチニン0.57mg/dL、総ビリルビン0.3mg/dL、Na 141mEq/L、K 3.6mEq/L、Cl 104mEq/L

免疫血清学検査：　CRP 0.03mg/dL

横行結腸の下部消化管内視鏡画像を次に示す。



問1 画像で認められる所見はどれか。

1. 輪状潰瘍
2. 縦走潰瘍
3. 打ち抜き状潰瘍
4. 偽膜形成
5. 敷石像

問2 この疾患で正しいものはどれか。

1. 病変は連続性である。
2. 肛門病変は伴わない。
3. 生検で乾酪性類上皮細胞肉芽腫を認める。
4. 炎症は腸管全層に波及する。
5. 喫煙は増悪因子ではない。

問3 この疾患の治療について正しいものを3つ選べ。

1. 栄養療法では、完全静脈栄養療法が第一選択となる。
2. 5-ASA製剤は、寛解の導入・維持のいずれの目的でも用いる。
3. 高用量ステロイドを寛解維持目的に用いることはない。
4. 活動性の感染症がある場合も、寛解維持目的に生物学的製剤を使用しても良い。
5. 腸管の狭窄が生じた場合は、内視鏡的バルーン拡張術を考慮する。

答え：

1. ｂ
2. ｄ
3. ｂ，c，e